

## 平成20年度 大学振興会研究奨励補助金報告書

## 1. 研究課題名

言語学者の研究評価方法：機能分析

国際コミュニケーション学部

所属学部：

職名：教授

研究代表者氏名： 深谷輝彦



## 3. 研究成果の概要 (1, 200字程度で記入。)

本研究により得られた知見は、以下の三点に要約できる。

第一に、本の価値を評価する書評記事は、基本的に好評だから掲載されている。記事全体が悪評の書評は見あたらない。これは、書評の役割が本の評価にとどまらず、読者に書評本の購入・読書を薦めるといった役割を担っているからである。この書評の機能は、「すすめる」という動詞の高頻度として実現する。

(1) 薦め：「薦めたい」「お薦めしたい」「薦められる」

勧め：「勧める」「勧められる」「お勧めしたい」「勧めたい」

その一方で悪評を表す「課題」という語の用法を観察すると、「課題であろう」という問題指摘がみられる。それと同時に、「課題を網羅的に紹介している」「課題がわかりやすくまとめられており」と課題列挙が好評につながっている。これは、今回の書評が言語学関連のもので、問題提起そのものに価値を見いだす学問というジャンルが関わっている。

第二の調査結果は、Martin & Rose (2003)の評価体系網において、書評が選択する評価は、感情・性格づけというよりも、本の価値を選択している点である。これを言い換えれば、

(2) a. 評者はこの本を読んで感動した。

b. (評者の評価では)この本は感動本である。

という言い方のうち、書評が用いるのは(2b)であるということである。その結果、評価を含んだ書籍表現が豊富に利用されている。

(3) 好著、必携、必読、必見、意欲作、宝庫、卓見、

もし(2a)に近い形を用いるならば、受動態を積極的に活用している。

(4) 頷かされる、考えさせられる、啓発される

この受動態により、本からの影響を強く受けている書評者の姿が明確になる。

最後に、一見したところ評価表現に見えないけれども、実際には圧倒的に好評さを示すフレーズ(語句)に触れておきたい。

(5) a. 「一冊である」 e.g. 薦められる/勧められる/薦めたい/必読の一冊である

b. 「一読」 e.g. 一読の価値がある/をお勧めしたい/を勧める

c. 「類」 e.g. 類まれな研究者、類を見ない必読書、比類ない入門書

d. 「上で」 e.g. 価値観の違いを知る上でも最高の本

(3)の語句の場合には、「好」「必」などの評価がみてとれるが、(5)の場合にはそれがかなわない。例えば「一冊である」は、それだけでは「一冊の本」という文字通りの意味である。しかし書評というジャンルで使われると、書評末に生起し、好意的評価をまとめあげる働きをする。

(6) フランス語学習者への励ましの書であるとともに、「そうだったのか」と膝を打ちたくなるエピソードや豆知識がいたるところに散りばめられていて、楽しく読める一冊だ。(星禁守之)

「一冊」は書評の基本文型である「AはBという本である」の「本」の代わりに正式表現であると言える。そしてBの部分で肯定的表現が主流である。なぜだろうか。書評の最後で、書評本の最終評価を行い、読書の勧めとしたいという書評の機能が作動しているからと考えられる。